

風○歲○暮○難○相○值○酬○歌○未○可○終○

欣喜の情想ふべきのみ、かくて、愈は再び京華の人となりぬ。

愈の入て祭酒に遷るや、直講の一人、能く禮を説いて陋容なる者あり、學官は多くは豪族の子にして、之を接けて共に食ふを得ず、愈乃ち吏に命じて曰く、直講を召し來り、祭酒と共に食せしめよと、學官此に由て、敢て直講を賤まず、愈が宏懷雅量、つねにかくの如し、又奏して儒生の學官となる日、會講をなさしむ、生徒奔走聽聞し、皆相喜んで曰く、韓公來て、祭酒となる、國子監寂寥たらずと、愈はどこまでも、當代の重望を負へる人なりき、この頃の事と覺ぼしく、雨中張籍に寄せし五律あり。

放朝還不報、半路踟泥歸、雨慣曾無節、雷頓自失威、見牆生菌徧、憂麥作蛾飛、歲晚偏蕭索、誰當救晉飢。

愈は當に後進を誘厲し、之を館する者、十六七に及ぶ、晨炊給せずと雖も、怡然として意に介せず、族姻友舊、自立せざる者、必ず頼て、以て衣食より、初めて嫁娶、喪葬を爲す、壯より老に至るまで、かくの如く、家人常に百口、

其貧なりしも、亦た宜なりといふべく、如上の一詩は、確かに個中の消息を傳へしものとなすべし、今夫れ銀燭星の如く、紅欄舞袖、風に翻るところ、妖姬の一笑に千萬の黄金を投じて惜まず、呼んで達となす者、世その人に乏しからず、而かも、かくの如き者、姻戚の窮困に對しては如何、相見て毫も知らざるが如く、之を門外に逐ひ、暴戾虎に似たる奴をして、撻つことさへ爲さしむるに憚らず、その心の冷なる、宛ら鐵の如く、忍べるも亦た甚しきのみ、彼が所親に對する已に然り、故を以て、客來て心徘徊せざる者あらず、陋巷破屋に踟躕して哭泣する者、牀頭黄金正に盡きて、泥中未だ雲を生せず、頼るところなきを奈何ともし難し、韓愈の如きは、確かに情に篤き人にして、己が嘗つて窘迫に處せしを以て、他を憐れむ、更に切なる者あり、况んや、才を愛すは色を好むに過ぎたるをや、余は記して此に至り、轉たその風貌を冥想し、若し在らしめば、鞭を執るも、忻慕する情に堪へざらむとするなり。

今首を回らして、世の大勢を窺はむか、河北の降服は、實に沈黙に過ぎ



る者にして、愈が豫想に違はず、再び亂れ初めぬ。盧龍の節度使劉總は、この正月に於て、かつて父兄を殺せし祟を懼れ、官を棄て、僧となり、張弘靖之に代りしも、驕貴自ら尊くし、年少輕薄の徒をして下を治めしめしを以て、忽ち衆望を失ひ、士卒連營、呼噪亂を爲し、之を囚へ、更に朱克融なる者を迎へて、留後となしぬ。之に次いで、成徳の兵馬使王庭湊、果悍陰狡の資を以て、亂を作さむと謀りしが、會ま節度使田弘正が糧を度支より給せられず、止むを得ず、自ら衛とせし二千の魏兵を謝遣せしに乘じ、即夜牙兵と結んで、弘正を殺し、又自ら留後と稱せり、かくの如きは、朝廷派遣の將帥、其人を得ず、廟堂の所置、宜きを失したる爲なりと雖も、軍民の強暴は、已に前より數ば見しところにして、如上の變も、要するに、かの汴州に於けると同じく、特に其故あるに非ず、而かも唯だ續發せし者に外ならず。

成徳の警一たび到るや、朝廷震駭して爲す所を知らず、魏博の節度使李愬、變を聞き、流涕して將士に令して曰く、魏人が聖化に通じ、安寧富樂な

りしは、田公の力なり。今や鎮人、不道、輒ち之を害す、是れ魏を輕んじて、人なしとなすなり。諸公は田公の恩を受けしもの、宜しく如何に之を報ずべきか。衆皆慟哭す。深州刺史牛元翼は、成徳の良將なり、愬寶劍玉帶を以て之に遺て曰く、昔吾が先人、此劍を以て大勳を立て、吾又之を以て蔡州を平げき。今以て公に授く、努力して庭湊を翦れ。元翼劍帶を以て軍中に徇へて曰く、願くは死を盡さむとす。でにして、朝命は、諸道に下り、征討の師は派遣せられ、元翼は深冀節度使となりて、先づ庭湊を討ちしも、却つてその圍むところとなりぬ。李愬は疾を以て起つこと能はず、横海節度使烏重允、全軍に將として、之を救ひしが、賊の俄かに破るべからざるを知り、兵を按じて、壘を觀つゝあり、而して帝之を怒り、重允を山南西道に移し、杜叔良なる者、かつて權幸に事へし故を以て、宦官の爲に薦められて、重允に代りしが、一戰して敗れ、李光顔代つて其任に上れり、かくの如くして、時勢の急迫は、自ら重望の老臣を起さざるを得ず。裴度は、擧げられて、鎮州の行營招討使となり、賊境に入り、凱歌し、ば、聞えぬ。愈



が嘗て作りし一序を以て其名を知られし當年の處士温造が殿中侍御史より轉じて起居舍人となり、諸軍宣慰使の名を以て軍に在りしも、亦た此時なりき。

軍民の亂外に在りてかくの如く、而かも内廷も亦た腐敗の極に達したりき。曩に憲宗の朝に在りて、威福を弄せし皇甫鏞程异、令狐楚の諸輩は、かつて穆宗をして太子の位を失はしめむと謀りしことありしが爲に、帝の即位後未だ幾ならず、或は捕へられ、或は逐はれ、或は誅せられて、專權の驕臣、漸く去り盡せしと雖も、存する者多くは善懦無能の徒のみ、而して穆宗の暗愚なるや、絶えて彼等が才足らず器の小なるを覺らず、次第に登庸して、重要な地位にまで進ましめたり。この輩の徒は、私利を恣にせむ爲に、自ら裴度を制肘し、毫も爲すなきに至らしめむとせり。度たるもの、豈に黙々として之を坐視せむや。乃ち一表を帝に上り、自己の誠衷を抒べ、帝の翻悟を求めたり。其中に曰く、

逆豎構亂、震驚山東、姦臣依朋、撓敗國政、陛下掃蕩幽鎮、先宜肅清朝廷、何

者爲患有大小、議事有前後、河朔逆賊、抵亂山東、禁閑奸臣、必亂天下、是則河朔患小、禁閑患大、小者臣與諸將必能剪滅、大者非陛下覺悟制斷、無以驅除、今文武百寮中外萬品、有心者無不憤忿、有口者無不咨嗟、直以獎用方深、不敢抵觸、恐事未行、而過已及、不爲國計、且爲身謀、臣自兵興以來、所陳章疏、事皆要切、所奉書詔、多有參差、蒙陛下委付之意、不輕遭奸臣抑損、不少、臣素與佞倖、亦無讐嫌、正以臣前請乘傳詣闕、而陳軍事、姦臣最所畏憚、恐臣發其過、百計止臣、臣亦請與諸軍齊進、隨便攻討、姦臣恐臣或有成功、曲加阻礙、逗留日時、進退皆受羈牽、意見悉遭蔽塞、但欲令臣失所、使臣無成、則天下理亂、山東勝負、悉不顧矣、爲臣事君、一至於此、若朝中姦臣盡去、則河朔逆賊、不討自平、若朝中姦臣猶存、則逆賊縱平、無益、陛下僕、未信臣言、乞出臣、表使百官集議、彼不受責、臣當伏辜。

滿廷の嬖臣朋黨比周の狀實にかくの如き者あり。かの翰林學士元稹、知樞密魏弘簡の如きは、深く結托して、相位に上らむことを求め、裴度が重望、ひたすら己が進路の障礙となるべきを顧慮し、度が奏畫するところ



軍務の獻策之を阻礙するもの亦た實に二人の爲す所なりき。度の一表熱血の文字に非ざるはなく、紙上風生するの概ある、自ら其故なくむばあらず。さしもの穆宗之を讀て多少心に覺る所あり、元魏二人の官職を下せしと雖も、全く斥逐することを爲さず。之を遇するは依然として、故の如くなりき。知るべし。穆宗は裴度之言を是としたるに非ず。唯だ前朝の老臣自ら勢威の存するが爲めに多少畏るゝ所ありて然りし者なるを。

裴度はかくの如くして、漸く小豎の制肘を逃れ、將に大に畫策する所あらむとせしも、やがて復た之を斷念せざるべからざる否運に會へり。かつて憲宗が多年の征戍に因て、漸く缺乏を感じたる府庫の財政は、穆宗の驕奢度なくして、賞賜節なきと、幽鎮兵を用ひて久しく功なきとによりて、益す壞亂糜敗の狀を呈しぬ。國帑すでに盡くれば、何に由てか、久しく師を外に出すを得む。懦弱なる執政輩は、協議を爲し、一時の綱維策として、罪の輕重により、叛臣の中の或者を赦し、以て他を攻めしむるに決

せり。かくの如くして、王庭湊を以て重しとなし、朱克融を以て輕しとなし。後者は長慶元年の十二月を以て、罪を赦されて平盧の節度使となりぬ。之を耳にせし魏博は、忽ち亂れ、其將史憲誠は、節度使田布を殺して、留後となり、節度たらむことを求めぬ。すでに朱克融を赦したる朝廷は、特に偏すること能はざるを以て、其請を聽けり。かくて憲誠は、外、朝廷を奉ぜしと雖も、内は實に幽鎮と連結せり。こゝに於てか、征討の軍は、専ら王庭湊に向へりと雖も、事意の如くならず、深州の圍は、長しへに解けず。牛元翼は、孤城落日の觀あり、官軍三面より之を救はむとせしも、糧道通ぜず。饋運皆途にして、賊に奪はれ、懸軍深く入りし者は、凍餒の苦を嘗むるの止むを得ざるに至り、李光顏の如き、亦た壁を閉ぢ、自ら守りて出でず。朝議は、遂に亦た王庭湊を赦し、成徳の節度使たることを允認せり。叛臣を赦す、かくの如く容易にして、且つ無條件なる者、古今の史乘に於て、絶えて類例を見ざるところ、かくして朝威全く地に墜ち、河朔三鎮は今後いかにするも制御すべからざるに至れりき。



王庭湊はすでに成徳の節度使たるを得たりしも、猶ほ且つ求むる所あるものにや、未だ容易に深州の圍を解かず、官軍すでに還りて、牛元翼は全く孤立の位地に在り、其命旦夕をさへ知らざるなり。朝廷は之を哀んで、王庭湊を説き、圍を解かしめむことを欲せり。さばれ、河北の將士は、權詐百出の虎狼なり、誰か一命を賭して、彼地に赴き、善く王者の使命を辱しめざる者ぞ、衆人の眼は、一樣に忠直剛毅、氣節山の如き士に屬せり。是に於てか、三年以前、佛骨の一表を上り、忠烈を以て天下を震動したる韓愈は、この選に當りき。滿廷の朝士、盡く是れ士犬瓦鷄のみ。一人の愈に及ぶ者、あらずりければならむ。かくて愈は、前に兵部侍郎の職に遷りしを幸として、鎮州に赴き、庭湊の軍を宣慰することゝはなりぬ。

唐代氣節の士を擧ぐれば、二顔に過ぐる者あらず、顏真卿、平原の太守を以て、二十四郡一人の義士なき時に方りて、兵を擧げ、長安の天子をして嗟嘆せしめしは、云はずもわれ。後年八十の老軀を以て、盧龍の軍に使し、叛首李希烈を叱し、義帝號を許さず、遂にその毒手に斃れしに至りては、

精忠凛然、千古に朽ちず、鬼神壯烈に泣く者ありしや、疑ふべからず、而して此事のありしは、建中二年にして、愈が歳正に十四、おもふに、その之を聞くや、歔歔、嗚咽、欽慕、哀惜、罷む能はざる者ありしならむ。今や時勢は愈を驅て、眞卿と同じ運命に立ち、至らしめ、愈が身に、前朝の忠臣を學ぶべき時は來れり。

愈が兵部に侍郎となりしより、こゝに數閱月、征討の事に至りて、建議する所ありしや、必せり、而してその用ひられざりしこと、想像するに難からず。今やこの大變に方り、驟かに之を起して、事に従はしめむとす。何時もながら勝手がましき廟堂の常なりとはいへ、我を視ること牛馬より甚し。愈が心中、寧ろ不満の念なからむや、愈は疾くより、職を罷めむと欲せしこともありしならむ。然れども、生來一片愛國の誠志は、爲す能はざる地位に在つて、尙ほ爲さむとする所あり。今や重任を以て囑せられ、而かも辭せざりしは、即ち此故のみ。小人の朝廷の爲に盡すに、あらず、暗君の命令の爲に動されたるにも、あらず、唯だ、大唐の社稷に對して、臣子た



る己が責を全くせむとしたりしのみ、頽齡五十有四、斑白の老翁、氣を吐  
けば虹の如し、愈は決然として起ち、將に早く行かむとせり。

愈は赤手にして、虎穴に入らむと欲するものなり。故を以て、朝臣さすが  
に之を危ぶむ者多く、元稹も亦た穆宗に言て曰く、韓愈惜むべしと。その  
入らば庭湊の爲に殺されんを懼れてなりき。穆宗聞いて悔み、詔して曰  
く、境に至れば事を度て宜しきに從ひ、必ずしも入ること勿れと。暗愚の  
君も猶ほ且つ憐閔の情を動かさざるを得ざりしなり。愈對へて曰く、止  
むるは君の仁死するは臣の義安んぞ君命を受け、滯留して自ら顧るも  
のあらむやと。愈の胸中果して成算ありしや、否や、之を問ふを要せず。死  
だも且つ辭せざりしは事實なり。かくして、愈は遂に往けり。

愈の鎮州に使用するや、吳丹なる者、駕部郎中を以て行に副たり。途中太原  
に次し、詩を賦して、之に示して曰く、

明明聞街鼓、晨起似朝時、翻翻走驛馬、春盡是歸期、地失嘉禾處、風存蟋蟀  
聲、暮齒良多感、無事涕垂頤、

壽陽驛に次して、吳郎中が詩後に題する絶句一首あり。

風光欲動別、長安春半邊、城特地寒、不見園花、兼巷柳馬頭、惟有月團圓、

或は此詩を以て、その二侍妾に贈りし者ととなす、語の婉約、平生に似され  
ばならむ、今必ずしも穿鑿するを要せず、唯だ難を犯し危に向ふの間、胸  
中綽々として餘裕あるを知れば、足らむのみ。承天の行營に次しては、そ  
の招討使たりし裴度を見、之に酬ひし詩あり。

竄逐三年海上歸、逢公復此著征衣、旋吟佳句還鞭馬、恨不身先去鳥飛、  
蓋し前に度に従て、蔡を討ち、今復た庭湊に使用するを以て、懷舊の情、堪へ  
難きものあるをいふなり。鎮州に近づかむとして、又裴度が重ねて寄せ  
しに酬ひし詩あり。

銜命山東搃亂師、日馳三百自嫌遲、風霜滿面無人識、何處如今更有詩、  
かくて愈は遂に鎮州に達し、庭湊と會見することゝはなれり。愈の鎮に  
至るや、庭湊刃を抜き、弓に弦し、以て之を迎へ、先づ其膽を奪はむとせり。  
愈は固より之に屈する者に非ず、昂然として入りぬ。館に及べば、亦た甲



士の庭に羅するあり、既にして坐す。庭湊曰く、紛々たる所以の者は、乃ちこの士卒の爲すところ、庭湊の心に非ずと、憎くむべし。叛將は飽くまで、朝使を愚にし、之を威嚇せむとするなり。愈直に聲を勵して曰く、天子公を以て將帥の材ありとなし、故に賜ふに節旄を以てしぬ。知らず、尙書乃ち健兒と語る能はざるか、と駁し得て、太だ峻語未だ終らず、甲士前み奮て曰く、先に太師國の爲に、朱泚を撃ち、血衣猶ほ在り、この軍何ぞ朝廷に負かむ、乃ち以て賊と爲すか、と愈曰く、爾等先太師を記せずと思へり、若し記すれば善し、且つ順と逆とを爲すとの利害は遠く古事を引く能はず。唯だ天資以來の禍福を以て、爾等の爲に之を明かにせむ。安祿山史思明、李希烈、梁崇義、朱滔、朱泚、吳元濟、李師道等、若しくは子若しくは孫の在ることありや、亦た官に居るものありや、と衆曰く、無し、愈語を繼いで曰く、田公魏博の六州を以て朝廷に歸す官は、中書令として、父子旗節を受け、子孫孩提に在りと雖も、皆美官たり。王承元この軍を以て、朝廷に歸し、弱冠にして節度使となり、劉悟、李祐、今皆大鎮たり。汝曹亦た之を聞くか、

と衆曰く、弘正刻なり、故に此軍安からず、愈曰く、然り、爾が曹、田公を害し、又その家を殘へり、復た何ぞ道はむ、と衆乃ち譴して曰く、侍郎是を語れ、と庭湊是に於てか、衆心の動かむことを恐れ、之を壓いて出でしめ、因て泣いて愈に謂て曰く、侍郎來る庭湊をして、何をか爲さしめむと欲すと、愈曰く、神策六軍の將、牛元翼が比の如き者少からず、但た朝廷大體を顧るに之を棄つべからず、公久しく之を圖むは何ぞや、庭湊曰く、即ち之を出さむ、愈曰く、若し爾らば事なからむと、庭湊すでに衆心の搖動せむことを慮り、愈をして歸らしむるに如かずとなし、因てかくの如くせしのみ。余は愈が此行如何なる効果をなせしや否やを問はざるべし。た剛毅と氣節とを以て、さしもの暴臣をして、暫時なりとも尾を帖し、耳を低れ、謹んで朝命を受けしめしを多とせずむばあらず。故に或は評して曰く、韓愈が宣慰の行、殆んど眞卿と異なることなし、而して偶々免るゝを得たるは、幸のみ、その庭湊を詰責する辭を觀るに、簡嚴切直、今に至りて、凛々猶ほ生氣あり、忠鯁大節、かくの如し、世或は文士を以て之を視るは、



非なりと然り愈の本志は固より彫蟲篆刻にあらず死を見ること歸るが如き堂々の大節は當時他に求むべからざりき。

庭湊はしばらく愈に聽きしと雖も未だ特に命を發することを爲さざりき未だ幾何ならずして牛元翼は十騎を將ひ園を突いて出でぬ庭湊もさすがに之を追ふことを爲さずかくて深州の將士は城を擧げて降を納れしも庭湊は怒を移してその久しく堅守せしを責め將卒百八十人を殺しぬ河北の將士暴なることかくの如く殆んど奈何ともすべしなかりしが獨り愈は庭湊の爲に厚く禮せられ事なくして京に復命するを得たりき鎮州初歸の時に曰く

別來楊柳街頭樹擺弄春風只欲飛還有小園桃李在留花不發待郎歸

これ懷人の常語のみ愈はさすがに故國を忘るゝ能はざりきかくて歸りて其語を奏するや上大に悦で曰く卿直に伊に向てかくの如くいへるかぞ穆宗も今は明に愈が忠直無雙なるを知り漸く之を登庸して深く依頼せむとするに意ありき。

愈が成徳の宣慰は驕將をして多少危懼する所あらしめしと雖も究極は唯だ元翼を追はざらしめしのみ特に記述すべき者もあらず然れども之を以て愈の功なきを責むるは非なり穆宗の時に際して藩鎮が如何に專横なりしか余をしてしばらく前記諸條の結論を具し概括的に語らしめよ初め帝の位に即くや兩河略ぼ定まる蕭俛段文昌の輩謂へらく天下已に太平なり漸く兵を銷すべしと密に請ふて天下の軍鎮兵を有する處に限り八人の逃死を限ることいなしぬ時に帝方に荒み國事を以て意と爲さず遂にその奏を可とし軍士因て落籍する者多く昔山澤に集り盜をなしぬ朱克融王庭湊の亂を作すや一呼すれば亡卒皆集りし者其故なきに非ず是に於て詔して諸道の兵を徴し之を討たしめしも盡く臨時召募烏合の衆のみ且つ諸節度には既に監軍ありその偏軍を領する者も亦た中使を置き傳を監せしむるを以ての故に主將は唯だ位にあるのみ號令を専らにするを得ず若し戦少しく勝てば驛を飛ばして捷を奏し自ら以て功と爲し勝たざれば主將を脅し罪



を以て之に歸す。是に於てか、老將絶えて功なく、雄帥しばし敗ぶる中、使は尙ほ軍中の驍勇を擇んで自ら衛り、羸儒庭弱の者を驅りて戦に就かしむ。故に戦ふ毎に敗れざるなきなり。之に加ふるに兵を用ふる舉動、禁中より授くるに方略を以てし、而かも朝令夕改、從ふ所を知らず、可否を度らず、唯た連戦せしむ。使者冠蓋途に相望み、驛馬足らず、行人の馬を奪うて之に繼ぐにいたる。故を以て、迢迢たる官道の上、絶えて行旅を認めず、かくの如くして十五萬の衆外に暴露し、裴度、元臣重望を以て之を統べ、烏重胤、李光顏、當時の名將を以て之を指揮せしむ。幽鎮萬餘の衆と相對し、屯守年を踰えて、竟に功をなさず。財と力と俱に盡きぬ。顧みれば、玄宗の末年、羯兒の叛の爲に、一たび河北を失ひてより、擾亂日に甚しく、憲宗の時のみしばらく沈靜の姿をなせしむ。その失政と穆宗の暗愚とは、愈よ之を激發し、遂に復する能はず。而して唐朝を亡したるは、實にこの三鎮の子孫なりと知らずや。

第十章 韓愈の末年

長慶二年九月、韓愈は成德宣慰の功を以て、轉じて吏部侍郎となれり。然れども、其言猶ほ未だ用ひられず、擾亂の天下、勢愈よ切迫し、而かも爲すなきの徒は、日一日に進めり。これより先、元稹は寵を以て、遂に相位に上り、裴度は尙ほ朝に容れず、依然として東都に留守し、ひたすら廟堂に入るの期を待てども得ず。而して元稹が度を怨み、その兵柄を解かむとしたり。一事は、翻て度の爲に多少の便宜を與へき。諫官諸輩は、争うてその不可を鳴らし、時未だ兵を偃せず。度に將相の全才あり、宜しく之を散地に置くべからざるを論じぬ。穆宗乃ち度に命じて、入朝せしめしが、此時は猶ほ入れられずして、東都に赴けり。後數月を経て、四月に及び、再び入朝し、數日ならずして、淮南節度使となりしが、事を言ふ者、皆その外に出すべからざるを極言しければ、穆宗も亦た自ら之を重じ、制して度を留めて政を輔けしめ、王播を以て度に代り、淮南を鎮せしむることゝ爲せ



り裴度すでに朝に在り、かつて上奏せし如く、朝廷の紀綱を振起せむとし、先づ極力元稹を去らむと謀れり、然れども元稹は宦官に結び且つ天子の寵あり、容易に之を除くべからず、當時二人の間に激烈なる衝突ありしこと、之を想像するに難からず、蝸蚌の争は常に漁夫の利となり、今や猜臣李逢吉の乗ずるあり、六月に至り、元稹が罷められて、同州の刺史となるや、逢吉は講侍の舊恩を以て、代て相となり、盛に裴度を傷つけ、終に左僕射の閑職に就かしめぬ、かつて肅代の間に膨大し、憲宗の朝に一旦づ挫折したる宦官は、こゝに復た勢力を得、宰相を左右する實權を有し、自己の向背如何によりて、權力の平衡を變ずべきを覺りたり、次いで半年ばかりを経、三年の春にいたり、牛僧孺は相となれり、僧孺と共に相たらむを望みたりし李德裕は、先きに出でて浙西の觀察使となり、八年遷らず、之を聞くや、逢吉が己を排して、僧孺を引きし者となし、怨愈よ深く、遂に逢吉僧孺と反目せる人々と結んで、之を妨害せむと企てたり、所謂怨牛黨、李とは是れなり、紛々たる天下、翻雲覆雨日に甚しく、妬忌構陷

これ事とす、かくして朝威は長し、へに伸ぶることなかりき。

李逢吉すでに相位にあり、李紳なる者と初めより協はず、紳が中丞となるに及び、乃ち韓愈を除して、京兆尹となし、御史大夫を兼ねしめ、勅して臺參を許し、之を優遇し、以て相當らしめむと欲せり、愈が初めて官に上るや、六軍の將士皆敢て犯さず、私に相告げて曰く、是れ尙ほ佛骨をすら焼かむと欲せしもの、安んぞ忤ふべけむや、と故に盜賊止み、早に遇ふも、米價敢て上らず、愈の威望は、特に彰著なるものありき、愈は逢吉の爲に擧げられしと雖も、固よりかゝる小人に願使せらるべき人には非ず、李紳は性峭直、屢ば上疏して事を論じ、愈と辭理往復せしことあり、然れども狹量淺識、深く相知るに及ばず、紳かつて囚を械して、府に送り、尹の杖を以て之を杖たしめぬ、愈曰く、安んぞ此あらむと、速に其囚を歸さしめき、是に於てか、紳は愈を劾奏せしが、愈は詔を以て自ら解きぬ、其後、文刺紛然、兩者の間、調停成らず、逢吉は紳が方に幸せられて、旦夕に相たらしむとするを悪くみ、臺と府と協はざるを口實として、兩つながら其官を改



め、愈を以て兵部侍郎となし、紳を以て江西觀察使となしぬ。然れども、紳は帝に見えて、先づ留まるを得たり、而して愈が入て謝するや、穆宗が卿紳と何事を争ひしかと問ひしに對して、自ら辯じければ、數日にして亦た吏部侍郎となりぬ。凡そ此般の瑣事、特に詳記するの必要なしと雖も、余は之に因て、當時諸官變動の如何に頻繁なりしかを述べむとするのみ、蓋し諸官變動の頻繁は、疑もなく朋黨の争鬭を表示し、朋黨の争鬭は、やがて君主の暗愚と朝綱の壞弛とに由て生じたる權力の動搖を意味するものに非ずや、更に歴史的に之を括言すれば、憲宗の末年に登庸されたる不肖無能の臣は、漸く官を弄し、位を竊み、穆宗の朝に至りて、朋黨を樹て、所謂閣豎の輩之に乗じ、その平衡を轉せしめ、争鬭をして、愈よ大に愈よ劇ならしめ、内廷の紊亂かくの如く、日に益甚しく、外には河北三鎮の驕將暴卒、其欲するところを逞うせむとするあり、唐朝滅亡の理因たる三大動力は、すでに防遏すべからざる程、劇烈の度を加へぬ。唐の國家は、蓋しこの時に亡びたるなり。これより以後、宋全忠の篡國にいた

るまで八十年の間は、譬へば將死の老翁醫藥の功により、病床の上に幾日の餘命を維ぎ得し如きのみ。

唐朝の末路、人の官職ある者、如何に私利を營む徒を以て充されしかば、容易に推度し得べし。愈が鄭尚書の嶺南に之くを送る序の如き、頗る不滿の意あり、通篇唯だ大府の尊と境の内外利害の判るゝところとを説きしのみ、忽ち筆を轉じて、家屬百人、數畝の宅なく、屋を僦して以て居る、貴くして能く貧仁を爲す者は、富まざるの效なりといふに至りては、正さしく反語のみ、その豪侈を見て、諷諭一番せしに過ぎざらむ。愈は白髮氣尙ほ壯、丹心愛國の念、未だ已まざりしと雖も、頽瀾は既倒に回すに、山なきを奈何む。裴度は遂に出されて、山南西道節度使となりぬ。未だ幾ならず、翌四年正月に至り、穆宗は又金石の藥を餌せし爲に病を得て、終に崩ぜり、而して十六歳思慮なほ淺き敬宗は、立て大統を嗣ぎぬ。かくて内外の勢愈よ迫り來らむとせり。

歳の六月、翰林學士韋處厚奏して曰く、裴度勳中夏に高く、聲外夷に傳れ



り若し之を廟算に置き、その參決を委せば、河北山東必ず廟算を稟けむ。伏して承るに、陛下食に當て嘆息し、蕭曹なきを恨めり、と。今一の裴度あり、尚ほ此を留むること能はず、これ馮唐が漢文を謂ふて、廉頗李牧を得るも用ふる能はずとなせし所以なり。臣逢吉と素より私嫌なし、今の陳ずるところ、上は聖明に答へ、下は群議を達するのみと。李程また帝に勸め、遂に度を起して、復た相たらしめ、然れども時已に去れり、朋黨の争、旦夕を保せず、藩鎮遂に掃清すること能はざるなり。

すでにして無情の二豎は忽然來りて、愈を捕へ、之をして其職に堪へざらしめたり。その百日に滿つるや、愈は餘儀なくも、廟堂の危機を見捨て、告を請ひ、疾を城南の別墅に養ひぬ。時に張籍官の休罷に會し、兩月遊翔を同うし、又賈島の時に來り訪ふあり、南溪始泛の詩は正にこの時の作ならむと思はる、而して是れ不幸にも、やがて絶筆の作となれりき。

榜舟南山下、上上不得返、幽事隨去多、孰能量近遠、陰沈過連樹、藏昂抵橫坡、石磴肆磨礪、波惡厭牽挽、或倚偏岸漁、竟就平洲飯、點暮雨、飄梢梢新。

月○偃○餘○年○懷○無○幾○休○日○愴○已○晚○自○是○病○使○然○非○由○取○高○蹇○

南○溪○亦○清○駛○而○無○楫○與○舟○山○農○驚○見○之○隨○我○觀○不○休○不○惟○兒○童○輩○或○有○杖○白○頭○饋○我○籠○中○瓜○勸○我○此○淹○留○我○云○以○病○歸○此○已○頗○自○由○幸○有○用○餘○俸○置○居○在○西○曠○困○倉○米○穀○滿○未○有○旦○夕○憂○上○去○無○得○得○下○來○亦○悠○悠○但○恐○煩○里○閭○時○有○緩○急○投○願○爲○同○社○人○雞○豚○燕○春○秋○

足○弱○不○能○步○自○宜○收○朝○蹟○羸○形○可○與○致○佳○觀○安○可○擲○即○此○南○阪○下○久○聞○有○水○石○柁○舟○入○其○間○溪○流○正○清○激○隨○波○吾○未○能○峻○瀨○乍○可○刺○鷺○起○若○導○吾○前○飛○數○十○尺○亭○亭○柳○帶○沙○團○團○松○冠○壁○踰○時○還○晝○夜○誰○謂○非○事○役○

黃魯直この詩を愛して、詩人句律の深意ありと爲す、全詩玄澹能く自家の本色を除き了れり、而して終に當年天地の根を撐扶せし盤空の硬語に似ず、適往の氣力すでに消磨し盡せしに非ざるか、官に堪へて東部侍郎を辭したるは八月なりしが、詩にいへる如く、余俸の病身を養ふに足りしは實に幸といふべし、またこの前後の作と覺しく、一夜月明に對してうたひけらく、



前夕雖十五月長未滿規君來晤我時風露渺無涯浮雲散白石天宇開青池孤質不自憚中天爲君施斷斷夜遂久亭々曙將披況當今夕圓又以嘉客隨情無酒食樂但用歌嘲爲

すべて彼が晩年の作は豪宕ならずして精鍊に傾きたり是れ昔時の如く心性を刺撃すべき事に遭遇せざりしによるならむか。夏を経て秋に入り病終に癒えず時節すでに冬に入り窮陰人を傷ましめ霜雪の苦正に慘を爲さむとするときに方り病は益す危篤となり程なく最後は近づきぬ。

愈は屬續して語つて曰く某の伯兄徳行高くして方藥を曉り食するとき必ず本草を視る年は四十二のみ某は疎愚にして食禁忌を擇ばず位は侍郎となり年伯兄より出づること十五歳如し又足らずとせば何に於て足らむ且つ牖下に終るを獲幸に大節を失ふに至らず以て下に先人を視る榮なりと謂ふべしと愈は個人として多少の頓越に遇ひしと雖も先づ福分の存せしを自覺せしなりき然れども唐朝の臣子として

は未だ安らかに眠ること能はざる者あり内廷の動搖は漸く將に起らむとし河北の野また兵馬の警を聽かむとしつればなり愈は靖安里の私第病床の上に於てその子昶が進士の第に登れるを聞きせめてもの慰藉を得つゝ靜かに唐朝の衰微を默想し溘然として逝けり。

少微光微にして天狼芒なしあはれ唐朝第一の儒家とすべく文豪とすべく將た詩人とすべく之に兼ねて愛國者先覺者として俯仰天地に愧ぢざる巨人は逝きぬ時は長慶四年十二月二日歳五十六詔して禮部尙書を贈り諡して文といひぬ遺命すらく喪葬は禮の如くならざること無かれ俗夷狄に習ふて浮圖を書寫し日は七を以て之を數へ及び陰陽に拘はる如き所謂吉凶一に我を汚すことなかれどもふに愈は平生の主義に従ひ儒禮を以て葬られしなるべし。

韓愈すでに逝く諸家哀輓祭贈の作積んで山の如し余は此にその二三を録し桃李言はず其下自ら蹊を爲し絶代の名賢が如何に當時に推重



されし、かゝを知らしめ、む、李翊は愈と最も深交ありし人、その韓侍郎を祭る文に曰く、

嗚呼、孔氏云、遠揚、朱恣行、孟軻拒之、乃壞於成、戎風混華、異學魁橫、兄常辨之、孔道益明、建武以還、文卑質喪、氣萎體肢、剗剗不讓、儷花鬪葉、顛倒相上、及兄之爲、思動鬼神、撥去其華、得其本根、開合怪駭、驅滂湧雲、包劉越巖、並武同殷、六經之風、絕而復新、學者有歸、大變於文、兄之仕官、罔辭於艱、奏疏輒斥、去而復遷、昇黜不改、正言亟聞、貞元十二、兄在汴州、我游自徐、始得兄交、視我無能、待予以友、講文折道、爲益之厚、二十九年、不知其久、兄以疾休、我病臥室、三來視我、笑語窮日、何荒不耕、會之以一人心、樂生皆惡、言凶兄之在病、則齊其終、順化以盡、靡惑於中、欲別千古、意如不窮、臨喪大號、決裂肝腦、老聃言、壽死而不亡、兄名之垂星斗之光、我譖兄行、下于太常、登殯天地、誰云不長、喪車來東、我刺盧江、君命有嚴、不見兄喪、遣使奠、百酸攬腸、音容若在、曷日而忘、嗚呼、哀哉、嗚呼、哀哉。

劉禹錫、また祭文あり、今傳ふるもの、闕略多しと雖も、その之を推す、頗る

至れる者あり、並せて載せざるべからず、曰く、

高山無窮、太華削成、人文無窮、夫子挺生、典訓爲徒、百家抗行、當時勅者、皆出其下、古人中求爲敵、蓋寡、貞元之中、帝鼓靈鑿、奕奕金馬、文氣如林、君自幽谷、升于高岑、鸞鳳一鳴、蜩蟬革音、手持文柄、高視寰海、權衡低昂、瞻我所、在三十餘年、聲名塞天、公鼎侯碑、志遂表阡、一字之賈、輦金如山、權豪來侮、人虎我鼠、然諾洞開、人金我灰、親親尙舊、同其壽考、天人之學、可與論道、二者不至、至者其誰、豈天與人、好惡背馳、昔遇夫子、聰明勇奮、常操利刃、開我渾沌、子長在筆、予長在論、持矛舉盾、卒不能困、時惟子厚、竄言其間、顏顏、顏、磅礪上下、義農以還、會於有極、服之言、岐山威鳳、不復華亭、別有、中夜驚畏、簡書拘印、綬思臨慟、芬志莫就、生芻一束、酒一杯、故人故人、飲此來、

張籍は祭退之五古一篇を賦して曰く、

嗚呼、吏部公、其道誠巍、昂生爲大賢、委天使、光我唐、德義勳、鬼神鑒、用不可詳、獨得雄直、氣發爲古文章、學無不該、貫吏治、得其方、三次論諍、退其志、亦剛強、再使平山東、不吝所謀、臧薦待皆、寒羸、但取其才、良親朋、有孤稚、婚姻



有辨營、如彼天有斗、人可爲信、常如彼歲有春、物宜得華昌、哀哉未申施、中  
 年遽殂喪、朝野哀、共哀矧於知、奮腸籍在江湖間、獨以道自將、學詩爲衆體、  
 久乃溢笈囊、略無相知人、黯如霧中行、北遊偶逢公、盛語相稱明、名因天下  
 聞、傳車入歌聲、公領試士司、首薦到上京、一來遂登科、不見苦貢場、觀我性  
 朴直、乃言及平生、由茲類朋黨、骨肉無以當、坐令其子拜、常呼幼時名、追招  
 不隔日、繼踐公之堂、出則連轡馳、寢則對榻牀、搜窮古今書、事事相酌量、有  
 花必同尋、有月必同望、爲文先見草、釀熟借共觴、新菓與異鮭、無不相待嘗、  
 到今三十年、曾不少異更、公文爲時師、我亦有微聲、而後之學者、或號爲韓  
 張、我官麟臺中、公爲大司成、念此委末秩、不能力自揚、特狀爲博士、始獲升  
 朝行、未幾享其資、遂忝南宮郎、是事賴拯扶、如屋有棟梁、去夏公請告、養疾  
 城南莊、籍時官休罷、兩月同游翔、黃子陂、岸曲地曠、氣色清新、池四平、漲中  
 有蒲荇、香北臺、臨稻疇、茂柳多陰涼、板亭坐垂釣、煩苦稍已平、共愛池上佳、  
 聯句舒遐情、偶有賈秀才、來茲亦同并、移船入南谿、東西縱篙楫、劃波激船  
 舷、前後飛鷗鷺、回入潭瀨下、網截鯉與魴、踏沙撥水疏、樹下蒸新杭、日來相

與嬉不知暑、日長柴翁攜童兒、聚觀於岸傍、月中登高灘、星漢交垂芒、釣車  
 擲長綫、有獲齊歡驚、夜闌乘馬歸、衣上草露光、公爲游谿詩、唱咏多慨慷、自  
 期此可老、結社於其鄉、籍受新官詔、拜恩當入城、公因同歸還、居處隔一坊、  
 中秋十六夜、魄圓天差晴、公既相邀留、坐語於階楹、乃出二侍女、合彈琵琶  
 箏、臨風飄繁絲、忽遽聞再更、願我數來過、是夜涼難忘、公疾浸日加、孺人視  
 藥湯、來候不得宿、出門每廻進、自是將重危、車馬候縱橫、門僕皆逆遣、獨我  
 到寢房、公有曠遠識、生死爲一網、及當臨終晨、意色亦不荒、贈我珍重言、傲  
 然委衾裝、公比欲爲書、遺約有修章、令我署其末、以爲後事程、家人號於前、  
 其書不果成、子符奉其言、甚於親使令、魯論未訖注、手跡今微茫、新亭成未  
 登、閉在莊西廂、書札與詩文、重疊我笥盈、頃息萬事盡、腸情多摧傷、舊盤盟  
 津、北野空動鼓鉦、柳車一出門、終天無廻箱、籍貧無贈貲、曷用中哀誠、衣器  
 陳下帳、膠餌奠堂皇、明靈庶鑒知、勞瘁斯來饗、

この一篇の詩に由りて、愈が病中の事と、かつて其書を作るに意ありし  
 とを知るに足るべし。後に皮日休、かつて愈を以て大學に配饗せむを請



ひしが實際に行はれしや否やは知らず而して宋の元祐五年に至り朝  
散郎王滌潮州の刺史となり令を出して愈が廟を新にし元豊七年詔し  
て昌黎伯に封じ蘇軾爲に其碑を撰びしことあるは人の善く知るとこ  
ろ今復た費せず余はこゝに文公が傳を草し終り領を引いてかの白雲  
の郷を望むを禁ぜざるなり。

韓退之終

明治三十四年六月廿七日印刷  
明治三十四年七月一日發行

著作權所有

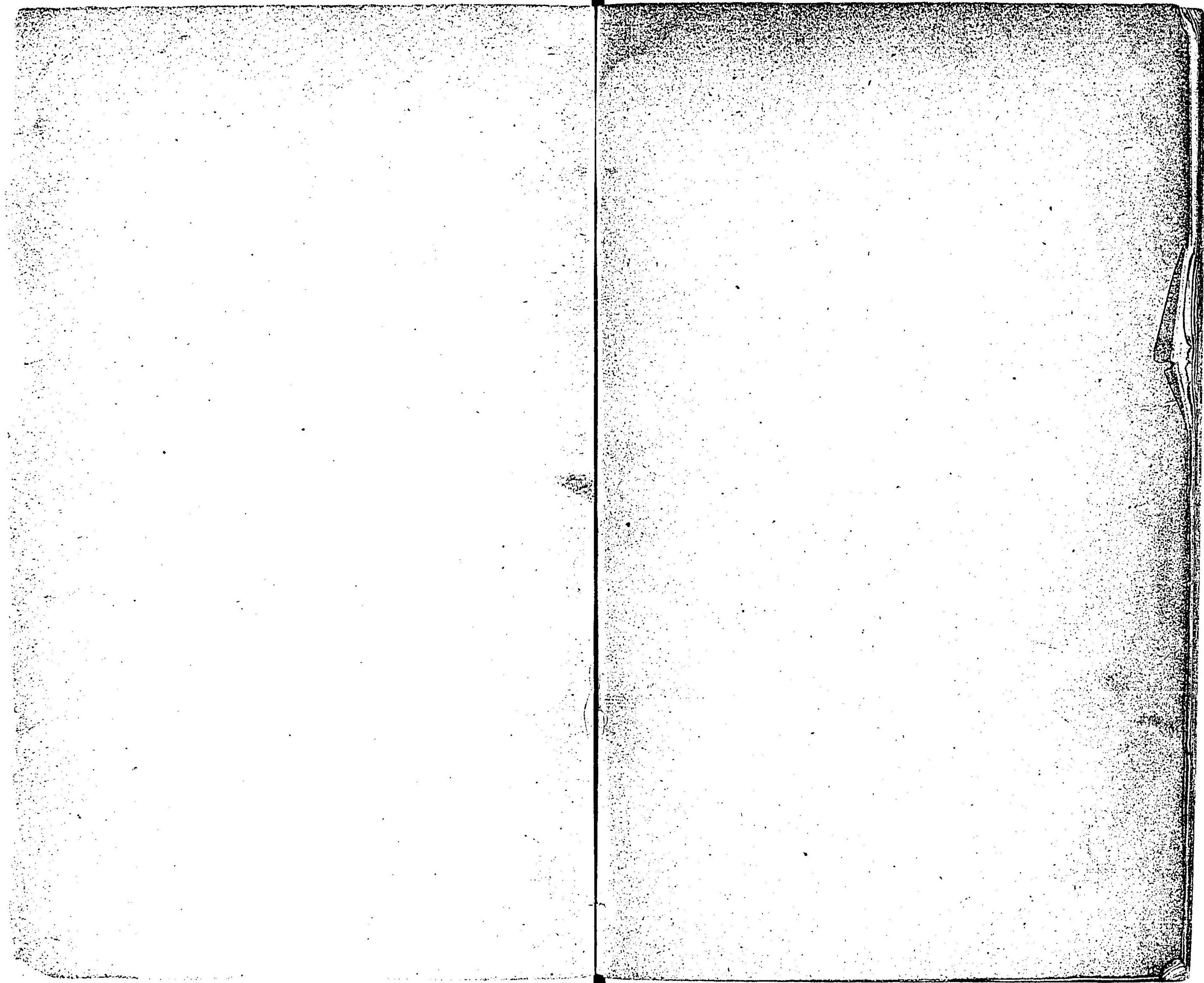
著者	久保得二
發行者	東京市日本橋區本銀町三丁目二番地 福岡元治郎
發行所	大阪市南區鹽町三丁目六十九番屋敷 中村寅吉
印刷者	東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 戸上義章
印刷所	東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舎第一工場

大阪市南區鹽町三丁目  
鍾美堂本店

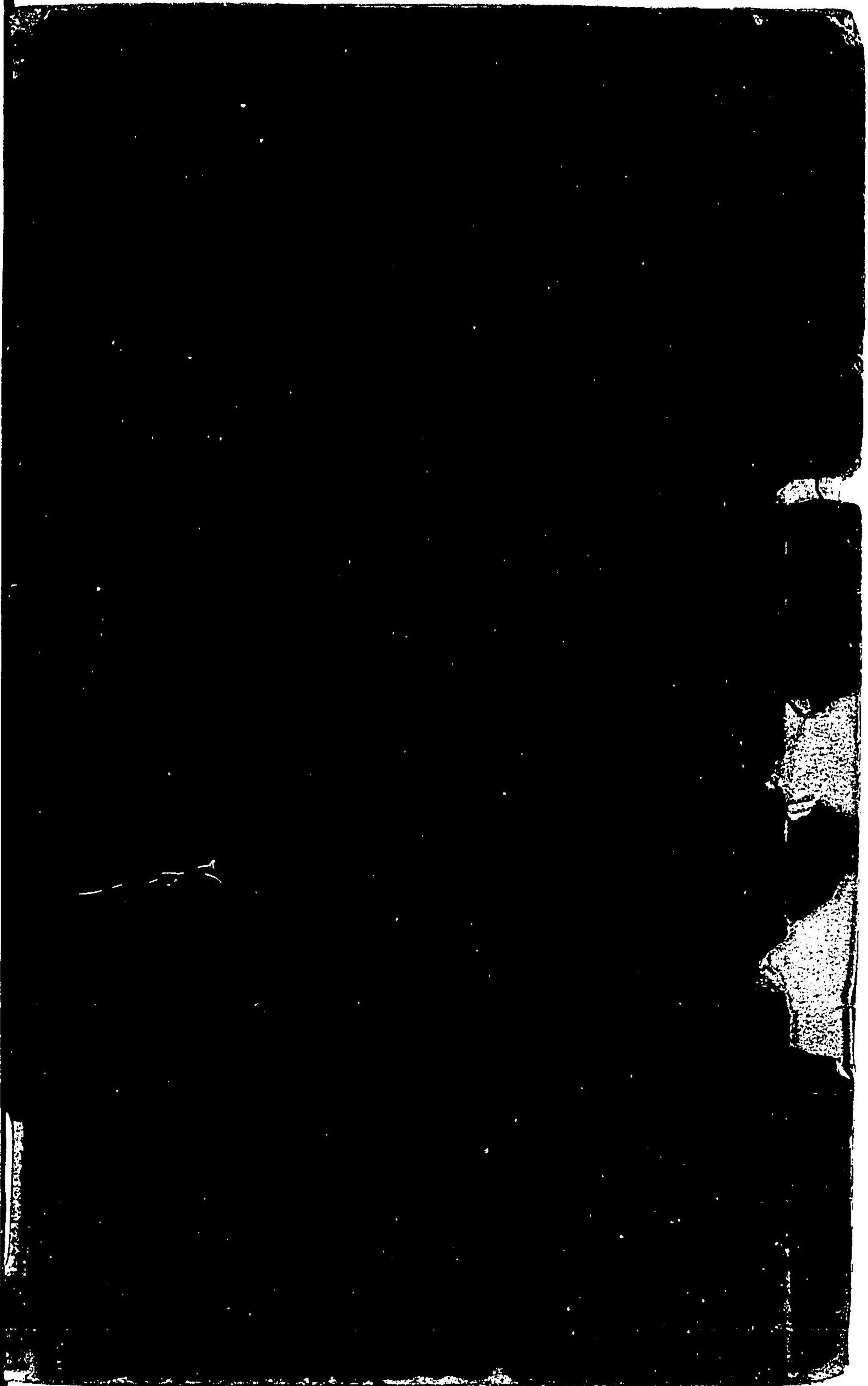
東京市日本橋區本銀町三丁目  
鍾美堂支店

電話本局百〇三番(長距離加入)









1-27-71 10:03 AM



91  
43

084703-000-4

91-43

韓退之

久保 天随/著

M34

DBA-0027

